

小野不由美作品における分離の象徴化(2)「秩序」と「世界の外」：『屍鬼』の登場人物に見られる「偽りの自己」

著者	田中 雅史
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
号	166
ページ	21-28
発行年	2016-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00001792

小野不由美作品における分離の象徴化②

「秩序」と「世界の外」

——『屍鬼』の登場人物に見られる「偽りの自己」——

田 中 雅 史

はじめに

前の論文「小野不由美作品における分離の象徴化①」では、小野不由美「十二国記」シリーズの『月の影 影の海』を取り上げ、十二国という異世界が陽子の精神内界を反映する場となっていることを論じた。陽子の周囲には自分を殺そうとする人間や妖魔が満ちている。中でも蒼猿という妖魔は陽子の心を読み、陽子の猜疑心や不安を煽り立てる。彼は、世界は迫害的な場所であり、生き延びるためには他人を裏切るしかない、という迫害的な世界認識に導いて、陽子を自殺に追い込もうとする。陽子は楽俊というネズミの半獣などの助けを借りながら、自他への攻撃性をコントロールする力を身につけ、蒼猿と向き合ってこれを斬り捨てる。ここでの蒼猿、楽俊、蒼猿を斬る行為などは、前エディプス期の幼児の精神内界モデルでいうと、「良い」対象、「悪い」対象、「良い」対象の取り入れと「悪い」対象の自我への統合などに相当する。それはつまり内界において「全能の母親」から分離した自己を確立するプロセスであり、『月の影 影の海』はこうした分離の言語的象徴化を含んでいる物語である。

陽子が達成した分離は、陽子をはじめとする小野不由美作品の登場人物の多くに共通する「偽りの自己」の克服でもある。「小野不由美作品における分離の象徴化①」でも述べたように、精神分析家のドナルド・ウィニコットのいう「偽りの自己」(false self)とは、幼児の自発的欲求に周囲が適応するのではなく、逆に周囲が幼児に干渉するという形で成長した場合に発達する、周囲に反応するための自己もどきである¹⁾。この論文では『屍鬼』を「母親からの分離」に相当する「悪い」対象の統合およびそれと裏腹の「偽りの自己」の重荷という二つの観点から見ていこうと思う。

舞台である外場村は現代にあっては閉ざされた異空間というべき地方の特殊な村である。屍鬼というヴァンパイアの集団に狙われ、次々に犠牲者が出る中で、

村の閉鎖性、事なかれ主義、若者の不満などのそこに潜在していた心理的な問題が浮かび上がる。中でも尾崎敏夫と室井静信という二人の旧家の跡取りが持つ感情、村社会とその秩序が自分たちに押し付けてきたものへの怒りと絶望がストーリーに大きく関わっている。また、屍鬼の側にも、世界の秩序から排除されていることへの苦悩や失われた肉親の温かみを取り戻したいという切望などの心理的な動機があることが徐々に明らかにされる。

この論文ではこうした点を取り上げて、それを前エディプス期の精神内界モデルと比較して論じたい。

1 屍鬼という存在

屍鬼とは、この作品で吸血鬼を指す名称である。屍鬼という言葉は実際にも存在しており、もともとインドの鬼神の一種であるヴェーターラが漢訳仏典で屍鬼と訳されたものである。『屍鬼二十五話』の訳者解説に下のようにある。

本書で「屍鬼」と訳したヴェーターラ (vetāla) は鬼神の一種で、死体に憑いてこれを活動させることから、漢訳仏典において、起尸鬼、起屍鬼、起死尸、起死屍鬼、起屍、屍鬼などと訳されている。(中略) 死体に憑く鬼神のみならず、死体を起す呪法を「ヴェーターラ」と呼んだ例もあるようである。ヴェーターラ、あるいはその呪法が頻繁に出てくるのは密教教典の中であるが、それ以前の仏典中でもしばしばそれについて言及されている。(中略) その信仰はおそらく仏教起源でもシヴァ教起源でもなく、むしろ古代インドの土俗信仰にあったものが、仏教やシヴァ教、特にタントリズム (タントラ教) に取り入れられたと考える方がよいであろう²⁾。

このようにもとは土俗信仰起源で死体を動かす鬼神

や死体を動かす呪法を指す言葉であった「屍鬼」は、小野不由美の『屍鬼』では登場人物の僧侶兼作家、室井静信の書いている小説中で、死んだ人間が起き上がって動き出した化け物の呼び名として使われた。これは静信のいる外場村で使われている民間伝承の用語で、ほかに「起き上がり」（いったん死んで起き上がった者ということ）や「鬼」という言い方もある。それを吸血鬼の中心人物である沙子が気に入って自分たちをそう呼ぶようになったのである。

『屍鬼』はスティーブン・キングの『呪われた町（セーラムズ・ロット）』に筋立てを借りており、沙子が外国人に噛まれたことが発端であることから、屍鬼はインドのヴェーターラというよりも、ドラキュラなどの西洋のヴァンパイアの一種であると考えられる。西洋種の吸血鬼である沙子がわざわざ屍鬼という言葉を選んで選んだのは、沙子が静信から聞いた小説〈屍鬼〉（以後、小野不由美の『屍鬼』と区別するために、静信の書いた方には〈〉を用いる）に見られる「神に祝福された世界から拒まれて絶望感」に共感したからだと考えられる。

沙子に今書いている小説のことをきかれた静信が「屍の鬼。起き上がりなんだ。死体が起き上がって、墓穴を抜け出してきてるんだよ。」と言うと、沙子は次のように言う。

「ちゃんと精神が宿っていて、人間と等価の存在なんだわ。けれども、生者ではない。ぜんぜん異質な存在」

言って沙子は、屍鬼、と口の中で繰り返した。いたくその単語が気に入ったようだった。（中略）「面白い。室井さんはお坊さんなのに、仏教でない宗教色の強い話が多いのね。今度は聖書でしょ？（中略）

「そう、異端者の話よね。カインって異端者でしょ？（中略）

「必ずそういう話なのね。神様に見放された誰かの話 [下線引用者]（上、pp. 467-468／第二巻、pp. 345-346）

下線部にあるように、沙子は自分と同じく死んでから動き出して知性もあるが、人間とは完全に「異質」で神に見放された存在である屍鬼という言葉で、自分たちを指す言葉にふさわしいと考えたのである。

沙子が仲間を増やし、外場村を屍鬼の村にしようと企てるのは、仲間や「家族」と安心して暮らしたいか

らである。13歳で吸血鬼になったことで強制的に家族から引き離された沙子には、強い愛情の渴望がある。

「血を吸う」という行為は、個人の境界を越えるという一種の融合的関係の実現でもあるし、川端康成「眠れる美女」、村上春樹『海辺のカフカ』などのように、そのような意味合いを象徴的にもたされている文学作品もしばしばみられる。ここでも沙子の家族的な温かさの希求は屍鬼という一見グロテスクな怪物の血の渴望とシンクロしているのである。つまり、屍鬼は、特に沙子という存在は、母親から引き離された幼児が持つ「見捨てられ感」や「愛情の渴望」という心理とつながっている。

沙子は静信のエッセイで読んだ外場村の描写が気に入って、そこを屍鬼の楽園にしようとする。外場村はかつて周囲の樅の木で卒塔婆を作ることで生計を立てていた村、いわば死とともに存在してきた村である。寺の息子であるとともに小説家でもある静信が書いた文章の中で、村は次のように描写されている。

村は死によって包囲されている。（中略）この樅の純林は、村を「死」として包囲している。（中略）死者のための滅びゆく樹、その純林は、まぎれもなく死者の国だ。三方を樅に囲まれて、村は死の中に孤絶している。（上、p. 3／第一巻、pp. 7-8）

ポーの「アッシャー家の崩壊」を思わせるような雰囲気である。沙子が外場村を気に入ったのは、土葬の習慣が残っているため仲間を増やしやすいという実際的な理由もあるが、そもそもそこがこのように祝福されない場所だからでもあった。それは祝福されない存在である自分自身と重ねて共感したからであろう。静信との対話で彼の小説の舞台が流刑地であることに触れた際、沙子は下のように言う。

「祝福された土地と、されない土地。楽園と流刑地——世界がそうやって二分されると、流刑地の外は楽園だってことにならない？」（下、p. 36／第三巻、p. 274）

沙子は〈外場村＝死の世界＝流刑地〉から楽園を作ろうとするのだ。外場村に沙子が作ろうと企てる屍鬼の共同体の核になるのは、正志郎と千鶴という擬似両親、人狼の辰巳という世話役などが構成する擬似家族である。彼らも皆、世界に疑問を抱く「神に祝福され

ていない」存在であるという共通項を持つ。この作品の最後の方で静信が使った表現でいうと「世界の外」にいる者同士の結びつきである。

「悪い」対象を投影されたような雰囲気をもつ村で、保護してくれる神から見放されたヴァンパイアである屍鬼たちが、家族的な絆のある自分たちの居場所を作ろうとしているので、これは社会秩序から離脱するという方向を鮮明に打ち出している点でやや変則的だが、ウィニコットのいう「抱える環境」を作ることで「悪い」対象を統合するプロセスを象徴化していると言えるだろう。「抱えること」(holding)はウィニコットが幼児の内的世界の発達の条件と考えた共感的な世話の核心であり、母親などの人間も含めた「環境」が幼児に不可欠であると考えた。

静信が沙子達の家である「兼正」という村の旧家の建物を訪ねてきたとき、沙子は自分でははっきり自覚していないがやはり世界の秩序に属せないでいる静信を擬似家族に加える。なぜなら静信の小説を読んでそのファンになった沙子は、静信も秩序に見放されて絶望していることを見抜いているからである。

スティーブン・キングの『呪われた町』では吸血鬼側のこうしたある意味人間的な事情というのはあまり描かれな。吸血鬼が擬似家族や仲間を求めるという話は萩尾望都の『ポーの一族』の影響であろう³⁾。『屍鬼』はキングの『呪われた町』に筋立てを借りながら、最終的には『ポーの一族』のような吸血鬼になった者の寂しさと仲間の希求の物語になり、そこに小野不由美のテーマである「偽りの自己」の問題が絡んでくる。そのことを、静信とその小説を中心に見ていきたい。

2 敏夫と「偽りの自己」

『屍鬼』は村の「現実」がモンスターの侵入によって揺るがされ、脅かされる物語だが、それは同時に「現実」に疑問を抱いていた者が「現実」を問い直す物語でもある。この点で特に重要なのは尾崎敏夫と室井静信という村の旧家の跡取りたちである。彼らは旧家と仕事を継ぐことの強制に納得できない思いを抱えている。

敏夫は村で唯一の病院の跡取り息子である。若い頃家業を継ぐことに反抗した後で一応医者になってはいるが、権威主義的な母親の孝江や見栄っ張り共感を欠く妻の恭子などを含め、村の人々を冷めた目で見て

いる。

尾崎の家はかつて周辺の基幹病院だったが、今では

町の病院に比べれば診療所のような小病院にすぎない。両親はそうした自分たちの意に染まない現実から目を背けていたのだと敏夫は考える。

もはや一介の医者にすぎなかったにもかかわらず、一介の医者であることを拒み通した男と、未だに拒み続けているその妻。

(不様な話だ……)

そんな生き方だけはしたくない。——断じて。
(上, p. 212/第一巻, p. 417)

だが、敏夫は反発しながらも母親の影響から逃れられないでいる。村に退屈して町にマンションを借りてアンティーク・ショップを開いた妻の恭子は、孝江に似ていた。

そんな孝江の息子、敏夫は孝江とも先代とも似つかない気性の持ち主だが、妻に選んだ恭子はやっぱり孝江のような女だというあたり、息子はかくも母親という存在から逃れられないものなのかもしれない。(上, p. 158/第一巻, p. 308)

敏夫の行動には32歳といういい大人でありながら、母親への反抗が動機になっているところがある。敏夫は居間と待合室の境にある廊下を「緩衝地帯」と呼び、待合室のドアを「国境」と呼んでいる。干渉過多の母親から自分の領域を区別して守っているのである。

村に原因不明の死者が増えて伝染病を疑ったときは、敏夫は必死で自分の役目を果たそうと努力する。しかし、屍鬼の存在に気づいてなんとかしようと奮闘しても、村人が屍鬼の存在を頑なに見ようとしない幼児的な態度を取ることに苛立ちを感じる。これは母親の孝江に対する感情と同じである。

自分の頭で考える気はない。自分の身体は指一本だって動かすつもりはない。喚いていれば現実のほうが連中の都合に合わせてくれると思っているんだ。それ以外のことなんて考えてみたくもない。連中は世界のなんたるかを分かってない。世界はベビーベッドじゃないんだ。周囲にいるのは泣けば飛んできてミルクやオムツを与えてくれる母親やベビー・シッターじゃない。(下, p. 514/第五巻, p. 41)

この村人たちの態度は前エディプス期の幼児の防衛

機制であるスプリットティングと全能感にあたるものであり、小野不由美がこのように描写しているのは本論の切り口である精神内界の象徴的表現という点から見て興味深い。後で静信の変化を考えると、「秩序ある楽園」から「人に役割を強いる流刑地」へと自分を排除している世界の見方が変わることを論じるが、村という世界に対するこの敏夫の見方は、村が母離れできない幼児性をもつ集団であるというマイナスイメージで描かれていることになり、静信の見方と重なってくる。

敏夫は人間対屍鬼の戦いのヒーローなのだが、この物語では人間側のヒーローの非人間性が物語の展開とともに明確に描かれる。大川の父親や千鶴に杭を打った群衆などが目立つが、屍鬼となった妻の恭子を実験台にして、屍鬼を倒す方法を探す敏夫にもそれが言える。彼は恭子に傷をつけたり、あらゆる薬物を使ったりといった残虐な行為を行い、それを知った静信と喧嘩になる。恭子は母親の孝江と似た女であると書かれているので、この行為は母親の孝江に対する感情が影響しているのかもしれない。つまり、「悪い」母親への攻撃性の発露かもしれない。

敏夫は最後に村が燃えた後で、自分の動機について次のように内省する。

自分は何かをしたかったのだ、この村で。村に唯一の病院、村人の生命を預かっていると言いながら、実はそれはすでに敏夫の手の中にはなかった。病院としての意義を失った病院、医師としての意義を失った医師、尾崎としての意義を失った尾崎。(中略) 自分はこの状況を支配したかったのだ。倦怠があった、辟易していた。何よりもただ虚しかった。だからこそ疫病を、あるいは敵を組み伏せることで自分の存在意義を掴み取りたかった。自分の振る舞いが世界を改変し得ることを、確認してみたかったのだ。自分の存在は決して、世界にとって無価値な泡沫のひとつにすぎないわけではないことを、自分にも他者にも証明したかった。[下線引用者] (下、p. 720/第五巻、p. 456)

下線部からは、一見屍鬼退治のヒーローである敏夫にも、対極に位置づけられる静信や沙子と心理的に類縁関係があることが見て取れる。医院が「すでに敏夫の手の中にはなかった」のは、敏夫が田舎の小病院という現実を受け入れないでいる両親を軽蔑しながらも、両親、特に孝江の意思の影響下を結局離れられないも

のだったからである。敏夫が「虚しかった」のは自分がそこにならなかつたからである。これは静信やその父の信明の場合にもっとはっきり描かれる「偽りの自己」であり、敏夫の疫病対策への情熱や屍から村を守るヒーローとしての振る舞いはその虚しさを紛らわすためのものだったと自分で認めている。つまり、敏夫も「世界の外」に疎外されていたという点では、屍鬼の沙子の側の存在であった。このことは、『屍鬼』が描こうとしているポイントが、「善である人間が悪である怪物から自分たちを守るストーリー」ではなく、「家族や共同体などの人間社会の強制によって自己を損なわれた人々の存在」であることを示している。

3 静信と父信明の「偽りの自己」

敏夫の幼なじみで寺の跡取りである静信は、敏夫ほど村への反発を自覚していないが、より根深い心の傷を持ち、かつて手首を切って自殺しかけた人物である。彼は兄が弟を殺し、屍鬼となった弟につきまとわれる屍鬼の物語を執筆中だが、自分が書いた兄弟の行動が自分でもはっきり理解できず、小説の結末をつけられずにいる。静信が小説中の兄弟を理解するプロセスは、自分自身のかつての自殺未遂を理解するプロセスと重なっていく。

静信は自分の中に正体不明の暗黒を飼っている。かつて自分は、それによって死を選ぼうとした。そして静信は今に至るも、自分がなぜ死のうとしたのか分からない。自分の中に死に至る暗黒があることを知っていながら、その暗黒の正体が分からないのだった。(下、p. 501/第五巻、pp. 17-18)

前の論文「小野不由美作品における分離の象徴化①」では、陽子の心であり、蒼猿に刺激されて活性化したネガティブな部分を取り上げた。対象関係論でいう「悪い」対象である。静信の心にある自分でも把握できない暗黒も、同様のものと考えられる。

前論文でも書いたが、幼児期の心の発達は母親のような世話をしてくれる「良い」対象の力も借りて、「悪い」対象を統合することで進んでいく。言い方を変えると母親の不在(の不快さ)に耐えられる力がつくことで、これが本論で言う「母親からの分離」である。対象関係論やその後の自我心理学のマラーなどのモデルでは、「良い」と「悪い」が分かれた心の世

界（メラニー・クラインが「妄想分裂」（PS）ポジションと呼んだもの）において、幼児は分離の不快さなどに起因する迫害的な空想に取り巻かれ、自力ではそれを処理することができないが、周囲の世話などに支えられて分離の不快さを認識し、「独り」であることを受け入れることで、「抑うつ」（D）ポジションに変わる。

静信は父である信明の行動と沙子らの屍鬼との対話を手掛かりに、自分の心を理解する力を得る。そしてそれを自分の〈屍鬼〉の物語に書いて完結させる。その物語はル＝グウィンズのゲド戦記でのゲドが自分の「影」を統合するように、自分の分身を統合するという「母親からの分離」に相当する内容であったし、それを書く過程で「世界の外」にいる自分自身を自覚した静信本人も分離を達成したと言える。その過程をこれから分析していくが、まずその前提として静信の父信明の場合を見てみよう。

父の信明は、村に蔓延する死がヴァンパイアである屍鬼によるものであると悟り、沙子に手紙を書く。屍鬼はその家の住人に招待されないと家に入れないのだが、信明は自分の部屋のみという条件つきで沙子を招待し、屍鬼になろうとしたのである。代々続く住職であり、村の危機に際して村を守る側にいるはずの信明が屍鬼になろうとしたのは、自分が一生住職という強い役割に縛りつけられ、寝たきりになってその役割からすら排除されつつ、なおも鷹揚な住職の仮面をつけ続けなくてはならない状況に絶望していたからである。

そう——信明は、己をただ一つの鋳型に押し込み、それ以外の生き方を許さなかった世界の全てを怨んでいたのだ。

檀家は彼に良き住職であることを求めた。彼らは良き住職を欲していたのだ。寺と墓を守る者が必要で、どうせそれが必要である以上、慈悲深い良きものであったほうが都合が良かった。ただそれだけのために、信明は矯正され刈り込まれ、彼らの欲するものであることを強要されてきたのだ。信明は体のいい贅であり、自分の存在に疑問を持つことさえ許されなかった。信明である必要などなかったのだ。彼らが求める振る舞いができる誰かが、寺に坐っていれば良かった。読経し、説教をしてそこに存在していれば、それは信明だろうと静信だろうと、他の誰だろうと構わなかったのだ。

彼はあまりの虚しさに身を切り裂かれる思いがした。[下線引用者]（下、p. 505／第五巻、p. 24）

下線部の「矯正され刈り込まれ、彼らの欲するものであることを強要されてきた」という部分は、信明の自己が周囲の干渉によって作られたもので、信明の真の希望はないがしるにされてきたことを示している。ウニコットは周囲の侵襲によって「偽りの自己」が生じると言うが、この信明の場合はそれに当たるだろう。そしてこうした状況が信明以外にも、静信、敏夫、さらに十二国記の陽子など多くの登場人物に共通していることを考えると、小野不由美は（ウニコットを念頭に置いているかはともかく）極めて意図的に「偽りの自己」を描き出そうとしていると言えよう。

静信はなぜ父が自ら屍鬼になろうとしたのかを知るために沙子のもとを訪ねる。沙子の暮らす兼正では、沙子を中心にある種の均衡を保った家族的な生活が営まれていた。沙子は夜明け近くに急に眠りにつくので、家はどこも遮光に配慮され、倒れた沙子を運ぶ辰巳の様子が描かれている。

「ここにいた」

すぐに廊下から正志郎が顔を出した。辰巳に頷いて、床に倒れた沙子の身体を抱き上げる。特に驚いた様子もなく廊下の外へと運び出していった。（下、p. 528／第五巻、p. 70）

辰巳は完全に死なずに屍鬼となった者で、太陽も平気で人の血を飲まなくても生きられる存在である。沙子は映画では吸血鬼の下僕は狼男だからという理由で、彼のような存在を人狼と呼んでいる。辰巳は正志郎を隷属していると評するが、兼正での彼らの暮らしぶりは、屍鬼というおどろおどろしい言葉の響きとは裏腹に、親密さを感じさせるものである。この「抱える環境」で、ウニコットのいう意味で静信を「抱える」機能を果たしているように見える沙子との対話を重ねながら、静信は自分の書いている〈屍鬼〉の物語で兄が弟を殺すエピソードについて少しずつ理解を深めることが可能になるのである。

4 静信の書く屍鬼の物語

静信の書く〈屍鬼〉の物語は、楽園である丘に住む兄弟の話である。弟は神に祝福され、やることはすべて受け入れられた。兄はその逆で、すべて否定された。

兄は弟を歛で殺すが、嫉妬や羨望が動機ではないと自分では感じている。罪が露見した兄は楽園から流刑地に追いやられ、起き上がって屍鬼となった弟は、兄につきまとう。静信は書きながら、二つの疑問を持つ。弟は殺される時、また屍鬼になった後も、自ら進んで兄に殺される。それはなぜか。また、兄はなぜ弟を殺したのか。

沙子はこの小説の愛読者で、先を読むために寺に来て原稿を読み、「殺意のない殺人はない／理由のない殺人はない」という書きこみまでする。(下, p.344／第四巻, p.269) 静信は書きこみに気づき、兄弟の死の理由について考える。

静信は沙子との対話の中で父について「ひょっとしたら父は、周囲の期待に應えていなければ成り立たなかったのかもしれない」と考え、屍鬼になって周囲の期待を投げ捨てた時、「あれほど憎んだ期待がなければ、成り立たない自分を自覚したとき、父は何を思うんだろう」と言い、それに対して沙子は「わたしだったら、死にたいぐらい自分に失望すると思うわ」と答える。静信はそこから自分の書いている物語の弟も、秩序から解放されるために死にたかったのかもしれないと思いつく。(下, 524-525／第五巻, p.62)

弟の中には神に対する——神の作った秩序に対する抜き差しならない憎悪があった。／その憎悪を押し隠し、良き隣人を演じることによって、弟は秩序に調和し神の寵愛を得ていたのだろう。(中略) 弟の中には秩序に対する嫌悪と侮蔑があったが、秩序が求める演技を拒むことができなかった。秩序を離れた自己を想像することができなかったからだ。(中略) そんな弟にとって、兄は毅然と生きる光輝だった。兄は秩序を畏れず、己の在りように逆らわなかった——そのように見えた。(中略) すすんで兄に屠られ、殺人という名の反秩序の成立に荷担することによって、弟は初めて秩序に背いた。[下線引用者] (下, pp.525-526／第五巻, pp.63-65)

下線部のように、沙子との会話から理解した信明の心情を物語の弟に当てはめている。フォントも地の文の普通のフォントから太字のフォントで書かれた物語部分へと静信の思考がまたがっていて、静信の現実と静信が作り出した虚構の物語が混じり合っていることを示している。

このように読者である沙子も参加するような形で物

語の着想を得て、静信は弟が進んで殺された理由を、弟が実は神の祝福を受けた秩序を激しく憎み、そこから自由であるように見えた兄を羨んでいたためであると理解した、もしくは自分自身や父親の内なる暗黒面とも重なるこうした弟の内面を発見したのである。

静信が小説の結末として描く兄が弟を殺した理由は、さらに衝撃的である。結局、彼に弟など存在せず、弟は自分だったというのである。

そもそも丘は楽園ではなく流刑地だった。神は流刑地に秩序を与え、住人はそれに適応したがそれはどちらにとっても表面的な関係であった。しかし、兄は心から善を望み、それがために神からは受け入れられなかった。そして兄は自分が自分であるがゆえに秩序に属さないものだと思うようになった。自分を「悪」だとみなしたのである。精神内界モデル的に言うと、自分を「悪い」対象と同一視し、迫害的状况に甘んじるようになったのである。

弟とは兄の報われぬ秩序愛がつくりだした幻であり、兄は秩序を求める気持ちと絶望とに引き裂かれて自殺した。悪霊となった兄はそもそも流刑地だった丘から出て、自分が死んだことにも気づかずさまよっていた。弟の姿をした自分の分身は夜を待たずに消え、その弟の名を呼んだとき兄はこうした現実に気づく。

殺したのは彼、殺されたのもまた彼自身だった。弟は彼の絶望の中から生まれた。そして彼はその絶望によって、弟と自己とを殺傷したのだった。(下, p.668／第五巻, p.352)

この兄の状況は作者の静信の置かれている状況でもある。静信は自分に押しつけられた役割に心の深い部分では納得できず、絶望していた。普段の温厚な静信は物語中の弟のように、作られた幻だったのである。それまで静信はそのことに気づけず、小説の結末を書けなかった。兼正で屍鬼たちと暮らすうちに、静信はこうした洞察を身につけた。

信明、静信、小説内の兄弟の状況は、ウニコットのいう「偽りの自己」にあたる。先に書いたように「偽りの自己」とは幼児に対する周囲の干渉が過剰であることで生じた防衛の産物であり、当人はそれが自分だと錯覚しているが、生きている実感を欠く。

信明は村の期待に生きてきた人生に絶望して屍鬼になった。小説では、弟は秩序の寵児を演じ続けることに絶望し、兄に殺されることでその呪縛から解放されようとした。その弟は実はかつて秩序を信じていた

兄自身の分身で、兄は神の祝福を得られないと自覚して自殺し、流刑地である丘から追放された。

静信の抱える暗黒とは、周囲の期待に従属する「偽りの自己」が生み出したもので、最終的に静信は自分が「世界の外」にいるという、小説の中の兄と同じ認識に達する。だが、世界が楽園でなく流刑地なら、前に引用した沙子のセリフにあったように流刑地の外、「世界の外」こそが楽園かもしれない。最後に近い場面で、人狼として復活した静信は、沙子に次のように言う。

人が世界の中で生きるということは、世界から自分の取り分を搾取して、自分以外のあらゆる他者を、自分のために折り曲げることなんだ。そうとも——この地上はそもそも罪人の住まう流刑地なんだよ。(下, pp. 716-717 / 第五巻, p. 449)

静信の書いた物語の〈屍鬼〉には、このような逆転の発想が含まれていたのである。それが、終章で静信が人間社会から離れて生きる決意を書いたハガキにつながっていく。

5 世界の外へ

静信が屍鬼を狩るべきか迷う場面がある。「屍鬼が人を狩ることを、すなわち悪だと言えるのか。」と考え、敏夫と論争になるのだが、何が悪なのかという点に関する込み入った静信の内省が、『屍鬼』中盤の大きな要素となっている。それは静信の中で、〈村＝世界＝秩序〉から〈村＝世界＝流刑地〉へと認識が変わる過程を反映しているのだ。

人狼となった静信は、沙子に言う。

僕は君が、なぜ十字架を畏れ、招待なしに人家に入りこむことができないのか知っているとと思う(中略)世界は君たち抜きで完璧に整合している。君たちはそこに二度と入ることができない。君は十字架を突きつけられたとき、何を思うだろう?」
「何を……」

「——自分が、圧倒的な少数であり、例外であり、秩序の外に、つまりは世界の外にあることを思い知るんだ」(中略)信仰は人々を束ねる。同門の隣人は血の繋がりはなくとも信仰という縁によってまとめられた同朋だ。信仰は慈愛を説き、博愛

を説く。同種の生き物に対する団結の要請。この団結は、小さくは傾いたバラックの家庭から、血縁集団へ、地縁集団へと繋がり、圧倒的多数の無意識という神性によって束ねられ縫り合わされ、太くモラルと法と常識という強固な絆を作って、人々を調和の中に編み上げている。[下線引用者](下, p. 715 / 第五巻, p. 447)

信仰によって人間の編み上げた世界は、異端者を排除して調和している。下線部にあるように屍鬼はその調和した世界を持ってないという宿命なのだから、屍鬼の楽園を外場村に作ろうという沙子の希望はそもそも叶うはずのない望みだったのだ。希望があるとすれば、それはむしろそのような現実から目をそらさずに受け入れるところにある。陽子が自分の中の見たくない感情を蒼猿を斬ることで受け入れたように、静信は沙子に、屍鬼が世界の秩序に入れないことを受け入れて存続し続けていこうと言う。

『屍鬼』の終章には、静信から編集者へのハガキの文面が書かれている。これは静信の小説〈屍鬼〉の出版のお礼のハガキであるが、そこには「これ以後、室井[静信]は死んだものとお考えください。」と書かれている。静信が沙子とともに暮らしているらしいことが終章で暗示されているが、自分も人間ではないし、沙子は人の血を必要とするので、入ろうとしても人間社会から拒まれざるを得ないという一抹の苦さはある。しかし、この静信の書いた文面には、自ら社会から離れて存在し続けていこうという決意のようなものが読み取れる。屍鬼が世界に入れないとしても、そもそも、〈村＝世界＝秩序〉が実は自分が同意したわけでもない役割を強制する〈村＝世界＝流刑地〉だったのならば、「世界の外」にこそ自発性に基づく関係性があるとも言える。『屍鬼』で描かれた人間の世界が無自覚の強制と恐慌状態の暴力という両極として描かれていることからすると、そう考えるのは不自然ではなからう。

おわりに

以上見てきたように、『屍鬼』の舞台となっている外場村とそこに侵入する屍鬼には、前エディプス期の精神内界モデルでいう「母親からの分離」に付随する「悪い」対象の象徴的表現を数多く見ることができる。そして、ウィニコットのいう「偽りの自己」に損なわれている登場人物の中のある者たちは、自らを苦しめ

ているのが秩序であり、自分が「世界の外」にいることを自覚して、象徴的な「母離れ」を実現する。静信が小説〈屍鬼〉を書く作業は、そのような象徴的「母離れ」と一体であった。敏夫も彼なりに自分の実情を把握した。一見すると十二国記の陽子の場合とは正反対のようだが、社会の秩序というものが「偽りの自己」を生む侵襲的なもの、すなわち分離を忌避する人々の集団が作り出したものであるとするならば、その外にあって存続し続けようとする行為は「真の自己」につながると言えるのではないだろうか。

注

テキストは小野不由美『屍鬼』上下（新潮社、1998年）を使用した。引用ページは、括弧内に記し、スラッシュの後に文庫版（全五巻、新潮文庫、2002年）のページもあわせて記した。

- 1) 小野不由美作品における分離の象徴化①自分自身の王であるということ——「十二国記」シリーズ『月の影 影の海』『甲南大學紀要 文学編 No 165 日本語日本文学科』2015年、p. 3.
- 2) ソーマデーヴァ『屍鬼二十五話 インド伝奇集』上村勝彦訳、東洋文庫323、平凡社、1978年、pp. 289-90（訳者による後書きより）。この資料については同僚の田中貴子氏よりご教示いただいた。記して感謝したい。
- 3) 萩尾望都の『ポーの一族』シリーズは、1972年から連載が始まった少女漫画で、バンパネラという吸血鬼になったエドガーとメリーベルという時を越えて生きる兄妹の物語である。バンパネラになった時、エドガーは14歳、メリーベルは13歳で、そのまま年を取らない。これは沙子が13歳のまま年を取らないことと符合する。また、当初エドガーたちは擬似両親とともに暮らしており、この点も『屍鬼』と同じである。